

<p>上演 3</p> <p>2022年7月31日(土) 3校目</p> <p>北海道 ブロック (北海道)</p> <p>北海道 大麻 高等学校</p> <p>「Tip-Off」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(鹿児島県) 鹿児島県立加治木高等学校</p> <p>恩田 彩衣</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

互いを思い合う気持ちが繋がり、ウイルス一つで止まっていた二人の歩みが再び動き出した。過去には戻れないがいつでもスタートを切れる、そんな希望を抱かせるような作品であった。

コロナウイルスが終息した後の世界が描かれた作品である。大学生になった浩太は同級生とともに新聞部の取材に呼ばれ母校を訪れる。彼はてっぺんを目指して頑張っていたバスケットをコロナに奪われたという高校生活を語りたくないようにも見える。それには引退試合や卒業後の大学生活で仲間の京介を裏切ったことも原因となっていた。高校時代の回想シーンを挟みながら物語は進んでいくが、浩太と京介は彼らの同級生の計らいによって再会することになる。経済的な事情からバスケットとは離れていた浩太は、事故にあつてなお浩太のためにバスケットボールを持つと京介の姿に動かされ、「これから始まるんだよ、俺たち。」と前を向いた。

タイトルの Tip-off は試合開始時のジャンプボールを意味する。ラストシーンではまさにその瞬間をストップモーションで切り取った。直前の「夕日に向かってダッシュだ。」のセリフから、浩太、京介の二人が手を伸ばすボールは夕日であり高校で目指したてっぺんであるように見えた。彼らはてっぺんを目指すことで引き裂かれ、てっぺんを目指すことで重なり合ったのだと感じさせられた。その姿がシルエットとなることは、それが一つの生き物であるようにも見えた。ラストシーンの美しさはそれが浩太たちの歩んできた苦しい道のりと、未来の姿の両方を思わせるものだった。

また、演出にも非常にこだわった作品だったと講評委員は口を揃えた。音楽と照明の活用により自然な時間軸の行き来を可能にしている、没入感があった。回想シーンでは、入学当初の伸び伸びとしたバスケットプレーとマスクをつけなければならない制約の日々との対比がうまく、ウイルスが広がるほど教室が息苦しくなっていくように感じ、過去や今のコロナの状況とも併せて考えられた。また、登場人物たちが教室を出ても置きっぱなしのこのセットは浩太や京介の思い出の中の教室を表しているのだとも考えられた。

特に再会のシーンではコロナによってすれ違っていた二人の思いが繋がったことが観客にも救われた気持ちを起こさせた。

「なんでもない」「謝らないで」などのセリフから、浩太と京介の真っ直ぐで、互いを思いやる気持ちが美しく表れていたからだ。怒りから机を叩く演出などの激しい感情も、リハビリを頑張っても手が震えてボールが持てないもどかしさも、そのままに伝わり引き込まれた。心を抉られるような苦しい芝居があつてこそそのラストシーンの美しさである。

私たち「コロナ世代」が体験したようなことが多く盛り込まれたセリフは、観客自身の経験も思い出させた。だからこそ二人が歩んできた道のりがどれだけ辛いものだったのかが身に染み、登場人物たちが「私たち、コロナ世代です」と過去を受け入れて前を向いた瞬間に多くの観客たちも前を向きたいと思えた。涙無しでは観ることのできない作品であった。

多くの講評委員たちが自分の体験を思い出していた。それは辛い経験であるはずなのに、「もう一度失った仲間に会いたい。」というような前向きな意見がたくさん出てきた。理不尽に止められる歩みはたくさんある。コロナウイルスによるものだけでなく、どのような挫折があつても、何度でも「Tip-off」というスタートを切って止まった時を動かそうとできるような勇気と決意を与えてくれた作品だった。